

---

# 3LDK

晴嵐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

3LDK

### 【コード】

N3516P

### 【作者名】

晴嵐

### 【あらすじ】

希望と不安を胸に上京してきた青年が見つけた、信じられないほどの格安の3LDK物件。その理由は。

## 第1話

「これで5件目かな。」

残暑が和らぎ始めた頃、大きなバッグとキャリングケースを地面に置き、

不動産の物件をのぞき込む、3日前に上京してきたばかりの青年。心の内に秘めた決意を胸に、新天地で一旗揚げようとしたのまではよかったのだが、

ここでいきなり苦境に立たされることとなる。

「ここで見つけられなかったら戻ろうかな。」

半ば自分で敗北宣言をするかのように言った後、ドアを開けて中に入った。

「いらっしやい。どんな物件がお望みで。」

そこには、人の良さそうな感じの初老の主人が、湯飲みを置いて青年の方へと向いた。

「できれば、2万円ぐらいのものがあればと思って・・・。」

今までの経験からいって、次には、あきれられるか又は追い出されるだろうなど

帰るための準備を考えていると、以外にも、その主人はにこにことした表情で、

「うちで扱っているものはこれだけ、納得のいくまで目を通すといい。」

まさに電話帳ぐらいの厚さのファイルを机の上に出した。

「こんなにもあるんですか？」

「もしかすれば、おまえさんの望みにかなうものがあるかもしれない。」

そう言つと主人は、相変わらずの表情でのんきにお茶を飲んで  
いた。

これが最後のチャンスだ。ここで見つからなかったら潔くあきら  
めよう。

青年は、そのファイルの一字一句を見逃さないがごとく見始めた。

どれくらいの時が過ぎたのだろうか、外は既に暗くなりかけてい  
た。

既にファイルの最後のページにさしかかり、本当にあきらめかけ  
たとき、

「すみません、この物件はありますか？」

青年は家賃のところしか見ていなかったがその物件は

家賃が1万5千と書かれ、部屋の規模は3LDKとあったのだ。

「この物件をお望みかね。」

「是非お願いします。」

そう言つて主人はファイルを見ると、先ほどまでの表情が曇り、

「ほんとうにこれでいいのかい。」

「ええ、構いませんが・・・」

「わかった。この書類に必要な事項を記入しておくれ。

敷金や礼金のたぐいは必要ない。ただし・・・」

主人がその先何と言つたのかは

すっかり浮かれている青年の耳には入っていないかった。

書類など、全ての手続きを終えたときに主人は部屋の鍵を持って  
きた。

青年は主人とその部屋へと向かった。

その部屋は最近できた6階建てマンションの一室だった。

主人に案内され4階の部屋の前に着くと鍵を開けて中に入った。部屋の中は本当にきれいで、居間にソファが置いてあるだけ。ほとんど新築状態ではないのかと思った。

「特にこの住人に問題のある者はいないから仲良くやっていきなさい。」

「ありがとうございます。」

主人が帰った後、青年はソファに横になった。

なんて運がいいんだろう、まさに逆転サヨナラホームランだ。

これで夢への大きな一步を踏み出したも同然だ。

そうだ、弁当でも買ってこようかな。

ソファから身を起こし部屋から出ると、同じマンションの住人に出会った。

ここで挨拶しておかないと後々響きそうだなと思い、

「さつき引越してきた雪代ゆきしろといえます。よろしくお願いします。」

「

その住人はいぶかしげに彼を見ると、

「この部屋に住んでいるのですか？」

「そうですが何か……」

「いえ、別に……」

そう言つと足早に去ってしまった。

どういうことなんだ、という疑問の前に、まずは腹はらごしらえの方を優先し、

近くにあったコンビニである程度買い込んで、再び部屋に戻り先ほどのことを思い出す。

よくよく考えてみれば、この規模で2万を下回るのは変だ。

よくある話だと、昔ここで殺人事件が起きたとか、自殺したとか、幽霊が出るという事があるはず。

青年は、部屋の隅々をくまなく調べたがそれらしい修復跡は見つからなかった。

考え過ぎかな、最近はマンションの供給過剰で値段が下がっているということを知っている。

たことがある。きっとここも入居者がいないから値段を下げるに決まっている。

もう変なことを考えるのはよそう。明日からは夢へと歩むためにがんばらないと、

でも、幽霊が出るとしても、可愛ければ大歓迎だけど。

本当にしょうもないことを考えるのはよそう、幽霊の正体見たり枯れ尾花というじゃないか・・・

そして、翌日から青年は仕事を探しに町へと向かった。

1週間ぐらいたっただろうか、青年は浮き足だつて部屋へと向かっていた。

やっと念願のソフトメーカーに見習いだけど雇ってもらえたぞ、最初の給料をもらっ

たら両親に何か買って送ろうかな。

足取りも軽く、ドアの鍵を開けようとキーを差し込んで回すが開いている。

おかしいな、確かに鍵をかけたはずなんだけど。でも、捕られるような物は何もないからいいか。

さして気にかげずにノブを回そうと触れたときに本能的に恐怖を感じ、

すぐさまドアから飛び退いた。

何で、急に飛び退いたりしなきゃならないんだ。  
気を取り直してドアを開けようとするが、  
その間、背筋が凍るような感じが彼を襲い続けた。

ドアを開け、一步入るが、先ほどの寒気はまだ離れなかった。  
何もわからずに、ただ怖がるのは自分としては気にくわなかった  
のか、

ほとんどやけになって誰もいるはずもないのに、  
「ただいま。」

と恐怖を吹き飛ばすかのように元気よくいうと、

「おかえりなさい・・・」

彼の予期しない返事が返ってきた。

声のする方向を見ると、ソファアのところにも一人の女性が座って  
いる。

髪は肩に掛かるほどの長さだが、うつむき加減なので表情はわか  
らない。

そして彼女はゆっくりと立ち上がると青年の方へと歩み寄って  
くる。

背丈はそんなに高くはない、しかし、相変わらず表情はわからな  
かった。

ゆっくりとした歩みで近寄ってくる。彼は逃げ出したかったが体  
が動かない。

きつと、顔を上げると恐ろしい表情でおそいかかってくるに違  
ないと、

彼の中では最悪を想定した状況がどんどんできあがっていく。

不意に彼女は立ち止まると、消え入るような声で、

「きつと、あなたも来るな化け物と言うのね。」

彼に問いかけるように言った。その言葉からは心なしか悲しみが感じられた。

しかし、やっと出てきた言葉は、

「どうして電気もつけずに暗いところで待っていたんだい。」

青年は何を口走っているんだと後悔していた。

しかし、彼女は顔を上げると、恐ろしい表情ではなく、狐につままれたような表情を見せた。

そして、くすくすと彼に微笑みながら、

「あなたみたいな人を待っていたの。」

そう言つと彼の前から消えていった。

やっと動けるようになり、部屋の電気をつけて彼女が座っていたところと反対側に

座りとりあえずテレビを付けた。

本当に幽霊が出るなんてどうしたらいいんだ。今更別の部屋を探

そうにも・・・

頭を抱えていると考え込んでいると、

「あの・・・」

反射的に声にする方へと向くと、

目の前で、先ほどの幽霊が彼をのぞき込んでいるではないか、

その瞬間、彼は断末魔に近い声を上げてソファアごと豪快にひっくり返った。

彼はすぐに起きあがり、ソファアの後ろに急いで移動しておそろおそろ顔を出した。

そして彼が見た光景は、先ほどの彼女も同じようにソファアの後ろから彼の方を見ていた。

その様子は自分と同じように、いかにもびっくりしたというようなもので、

彼はいつの間にか恐怖心がなくなると共におかしさがこみ上げてきて、声を上げて笑い始めた。

「まさか幽霊が出るとは思ってもみなかったよ。でも君みたいな幽霊なら大歓迎だ。」

ただし、暗闇で青白く浮かび上がるのは勘弁して欲しいけど。」

彼女はその場に立つと軽く会釈をして、

「私でよろしければ。」

「こちらこそよろしく。」

と握手をしようと手を差し出すが、もちろん握手なんてできるわけがない。

それでも、彼女はうれしそうに微笑みながら、差し出された手に自分の手を重ねた。

こうして彼の新生活は

家賃1万5千円。幽霊の同居人付き3LDKを拠点として始まった

## 第1話（後書き）

これはニフティのフォーラムへ投稿したものを若干修正しています。

## 第2話

翌朝彼が目覚めると部屋の様子はいつもと変わりはなかった。ただし、ひっくり返っているソファアが昨夜のことが夢ではないということ物語っている。

夢じゃなかったんだな。でも結構可愛かったし別に恨みを持って出てきたわけじゃないし。今夜もまたあえるかな。

ひっくり返ったソファアを直してから顔を洗って身なりを整え、キャリングケースを持って職場へと出かけた。

彼の就職先は最近できたばかりのソフトメーカーで大企業ではなかったにしろ、彼にとっては趣味と実益をかねた理想的なところだった。

職場の先輩たちもそのほとんどが彼と同じ夢を持っていることから溶け込むのにさして時間は必要なかった。

「雪ちゃん悪いけどこのプログラムを直してくれないかな。できはいいんだけどある特定の計算をするとフリーズするからそこだけを直して。」

「すぐに直します。」

彼にとって始め組むプログラムだが、予想外にできがよかったので内心胸をなで下ろしていた。

「雪ちゃん」と呼ばれているのは名字が雪代なので先ほどの先輩を始めとして同僚にまでそう呼ばれる始末。

しかし、好意的にそう呼んでいるので彼も悪い気分ではなかった。

自分の机に戻って先ほどの手直しをしていると、

「作り直しか？」

そう言っつてとなりの机にきたのはちょうど同時期に入社した安田だった。

「ほんの一部だけだね。でも結構手こずりそうだよ。」

「まだいいよ、こっちなんか他の企業でのメンテナンスばかり。自分でプログラムを組むなんて事ができないからな。」

「でも、いろいろな物をさわれるからうらやましいよ。」

「そうか、よく先輩方からご指名を受けているのに。」

安田はそう言いながら彼の背中をたたいた。安田も自分と同じような夢を持っていることから気が合う友人だ。

「今夜空いてるか。」

「悪いけど、これに当分つき合っついていかなきゃならないみたいだから。」

「それは残念だな。それが終わったら豪勢にいくか。」

「ああ、そうしようか。」

彼は笑いながら安田にそう言った。とはいえ実のところは昨日の幽霊のことが少し気になっていた。今抱えている仕事も当分長引きそうなのがするし、いつそのことこのまま持って帰った方がいいかなと考え先輩にそのことを打診すると。

「そうね、別にどこでもできることだから構わないわ。確か結構いいところに住んでいたっけ。」

「ええ、5件ぐらい回りましたが。」

「それが成功したら雪ちゃんのところまで盛大に祝賀会でもする？」

「ははは、近所迷惑にならない程度ならいいですけど。」

「それじゃ決まりね。」

残業で残ることになった安田に声をかけ先に帰ることにした。  
最寄りの駅について部屋へと歩いて帰るときにいろいろ考えた。  
今の部屋がどうしてあんなに激安なのかはわかったが、彼女だっ  
たら別に恐ろしくはないし、今までにあそこに住んだ人は出ていっ  
たのだから。

彼女に訊いてみたい気もするけど、もしかしたら気にしているか  
もしれないし、そことなく訊いてみようかな。

階段を上がってドアの前に立ち、鍵を開けようとするとき鍵はかか  
っていた。

今夜は出てこないのかな。まさかいちいちドアの鍵を開けて入る  
幽霊なんて聞いたことはない。

普通にドアを開けるが昨日のような寒気は全くなかった。本当に  
今日は出てこないのかなと少し残念に思いながらもつい、

「ただいま。」

と試してみたがどうせ返事はないだろうと思い、靴を脱いで上が  
ろうとすると、

「おかえりなさい。」

とききなり目の前に彼女が現れたので驚いて脱ぎかけた靴に引っ  
かかり見事にこけた。

その拍子にすねをぶつけてしまい声も出ないほどに悶絶している  
と、彼女は心配そうに彼を見ていた。

ようやく痛みが引いてきたので起きあがると、そこには彼女が本  
当に申し訳なさそうに見つめていた。

「いくら暗闇で青白く浮かぶのは遠慮してとは言ったけど、だか  
らと行っていきなり目の前に出てきたら驚くよ。」

そうは言ったもののその言葉にはきつさはなく、言った本人も半  
ば苦笑しながら言ったので彼女も安心したのか、

「驚かすつもりはなかったんですが、昨日のようにするとまた驚くと思って今日は少し趣向を変えてみました。」

まるでいたずらっ子のように無邪気に話す。

「趣向を変えるのはいいけど思いつきり変えすぎだよ。もう少し普通に出てきてくれないかな。」

幽霊に向かって普通に出てこいというのも何か変だが出てきてくれたことに内心うれしかったりもする。

部屋の電気をつけて居間のソファに座ってテレビを付けると、彼女もその隣に座った。

明るいと少し薄くなるけどそんなに気になるほどでもなく、初めて会った時のような寒気はいっさいなかった。

「他の住人にも昨日と同じようなことをしたの？」

「あれはあなたがたがただいまと言ったから答えただけで、他の人はみんな来るな化け物と言ってそれっきり出ていってしまいました。」

彼女は悲しそうな顔でそう言った。でもすぐに明るさを取り戻すと、

「でも、あなたみたいな方がここにきてくれて嬉しいんです。」

「僕にとっても激安のいい部屋だと思っていただけ、幽霊の同居人付きとは思ってもみなかったよ。」

どうやら他の人たちは、彼女を見るなり恐怖が先立ったようだ。わかる気もするけど、こうして話してみるとごく普通に見えないこともない。と言う自分も恐怖のあまり、訳の分からないことをいったのが彼女と知り合うきっかけとなったようなものだ。

彼女は相変わらずテレビを見ているが、これが幽霊でなければ普通なんだけど。

よくよく彼女を見ると、水色のワンピースを着ている、これが暗闇では青白く見える原因なのか。

彼女は視線を感じたのかこちらを向くと小首を傾げて、

「どうかしました。」

どうもこつも幽霊が自分の隣に座って一緒にテレビを見ていること自体が普通じゃないのだが、そうつつこみたい気持ちを抑えつつ、  
「別にね、どこを探しても幽霊と仲良くテレビを見ている人はいないんじゃないかなと思って。」

「私が言うのも何ですが、確かに変ですよね。」

にこにこしながら彼女はそう言うが、幽霊にしておくのはもったいないなとも思ったりする。

しかし、見ている番組が心霊特集となるといかに幽霊が恐ろしいものかと解説していても、彼女を見る限りは説得力ゼロでしかない。現に彼女はそれを見ながら怖いですねと言っているのだから。

幽霊が幽霊を怖がってどうする。でも幽霊にもいろいろいるのだからうなと勝手に解釈をした。

彼女を目の前にするとそうとしか思えないし。

そろそろ眠くなってくる時間になると彼女は、

「それではお休みなさい。今度からは普通に出てきますから。」

「ああ、たのむよ。」

消えていくのを見るとやはり幽霊なんだなと感心しながら眠りについた。

それからというものの昼は仕事にその後には彼女が話し相手になってくれる。

その日のことなどを話すと彼女は興味深げに聞いてた。

そんな日々が3ヶ月ぐらい続いたある晩。

いつものように彼女は現れたのだがいつものような笑顔はなく悲しげな表情だった。

「なにかあったの？」

「いえ、そうではないんです。ここに来ることができなくなりそうなんです。」

幽霊が来ることができなくなるなんて、もしかしたら成仏するのかな。

でも、いつまでもこの世にいるのはよくないと心霊番組ではやっていたはず。彼女だったら間違いないと天国へ行けるだろう。快く送ってあげなきゃいけないかな。

「残念だけど、今度生まれ変わるときは幸せにね。」

「ありがとう。でも、最後にあなたの名前を教えてくださいませんか。」

「そうだ、初めてあって以来名前を名乗ったことも聞いたこともなかったんだ。」

「そうだったね、僕の名は雪代 零。仕事仲間からは雪ちゃんなんて呼ばれているけど。」

彼女はくすくすと笑って

「可愛い愛称ですね、私は、、、」

彼女が言いかけたときにその姿が急に消え始めた。

「ごめんなさい、、、もう時間が、、、」

もはや完全に彼女はこの場から姿を消した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3516p/>

---

3LDK

2010年12月29日18時37分発行